

ニーチェと十九世紀後半のドイツの状況

I

舟越
清

本稿は、ニーチエ以後のドイツの作家たちのうち、何人かを取り上げ、その作家たちとニーチエの思想との関係を、ニーチエの影響という観点から考察するものである。まず最初に、ニーチエとニーチエ以後の作家たちの置かれた状況を見ることにする。

一 ニーチエと彼以後のドイツの作家たち

十九世紀末から二十世紀にかけてドイツ文学に影響を与えた思想家は、数多くいるが、その中でもニーチエほど大きな影響を与えた思想家は、数少ない。その刻印をわれわれは現代のドイツの作家たちの著作の中に見い出すことができる。いくつか例をあげてみよう。

「彼（ニーチエ）の読者はデカダンの市民階級であり、その階級は厳格な哲学的精神にほとんど好意的でなかった。」⁽¹⁾

「人間ニーチエはゆるやかではあるが、騒々しい爛熟期、責めさいなまれながら萎縮した個人主義が限界に達し、その限界で個人主義が自我の破壊を叫んでいた時期から解釈されている。ただし、この時代の病気の天才的な息子の中には、あのよりよい未来の花が、時代に先立って夢見るように咲いたが、そ

の花には偶然だが芽がすでに今日の気配を漂わしている。⁽²⁾」

「ディオニューソスの生は境界のない全体がひとつになった生であり、その生に比べれば、日常はこつ
けいで平凡な仮装のような状態である。⁽³⁾」

「ニーチェが、彼の精神の深いドイツ的特質を損なうことなく、彼のヨーロッパ主義によって、ドイツ
を批判主義的に教育することに、その知性化に、心理学化に、文学化に、革命化に、あるいは、政治的
言葉をはばからなければ、ドイツの民主主義化に、他の誰れよりも強く寄与したことは、疑い得ない。⁽⁴⁾」

ニーチェ以後に生きたドイツの作家でニーチェに言及しない作家はほとんどいない。一八七三年ニーチェ
のダヴィッド・シュトラウス批判が世に出た時、スイスの作家でニーチェと同時代の人であるゴットフリー
ト・ケラーですら、このニーチェの書に批判的に言及しているほどである。⁽⁵⁾ ニーチェの与えた反響の大きさが
わかる。

ニーチェの与えた反響は作家たちのニーチェ論に留まらない。作家の文学作品の中にもニーチェやニーチ
エの作品の名前が使われている。たとえば、ヘルマン・ヘッセ（一八七七―一九六二）は彼の初期の出世作で
ある『ペーター・カールメンツィント』の中でニーチェの名前を次のように用いている。

「『……わたしはもちろん学校で詩を書いていたが、今ではもう長いこと作詩などしておりません。』……」

『その詩は多分ことのほかモダンなものだったのでしようね。それはニーチェとたいへんかかわりがあるのでしょうか。』

『それはなんのことです。』

『ニーチェのこと？ え？ おや、まあ、あなたはその人を知らないのですか？』⁽⁶⁾

こうした表現はなにもこれにのみ留まるものではない。彼の後期の作品の中にもある。また、ハンス・カロッサ（一八七八—一九五六）は『美しき惑いの年』の中でこう述べている。

「明るく照らされたホールでは……わたくしたちが入った頃は、座席のほぼ半分は占められていた。息づまるような期待で顔が青ざめて柱にプロメーテウス氏が寄りかかっていた。彼はわたくしたちに会釈をしたが、しかし、わたくしたちが彼に話しかけようという大胆な思いつきなどさせないように、すぐにまた目をそらしてしまった。わたくしたちの前をツァラストラーネが歩いてきた。わたくしたちは当時一人のやせた赤毛の令嬢をそう呼んでいた。その令嬢は毎日カフェー・ステファニーでアブサン酒を飲み、いつも紫色の着物を着て、小さなグラスのそばにニーチェの本を置いていた。⁽⁷⁾」

ドイツの現代の作家に与えたニーチェの影響は、大きさ、深さにおいて他の思想家の追従を許さない。

二 ニーチェの時代の精神状況

二十世紀のドイツの作家たちは、ニーチェから深く影響を受けているが、その作家たちのニーチェ像の傾向を見ると、それはこれら作家たちの生きた時代の世界観の変化と深くかかわっている。

例えば、「彼（ニーチェ）の読者はデカダンの市民階級」とか、ニーチェの生きた時代を苦悩したうえ「萎縮した個人主義が限界に達し、その限界で個人主義が自我の破壊を叫んでいた」時期とし、あるいは、「ニーチェやイプセンのもとで育った若い人々の中にすら三十年前にいたのと同じ俗物が今日でもいる」と言っただぐあいである。

こうした当時の世界観の変化を感知したのは、ひとり作家たちだけではない。歴史家、政治家、経済学者など、ほとんどすべての分野の人々が感じ取っている。

例えば、ヨハン・グスタフ・ドロイゼンはこう言っている。

「現代は、あらゆるものが動揺し、測り知れぬ混乱と騒擾と野蛮化のまったなかにある。古いものはことごとく使い尽され、偽せ物化され、虫食いだらけとなつて、救いようがない。そして、新しいものは、まだ形が定まらず、目的がなく、混沌としていて、ただ破壊のみある。……ある世界的な紀元から他の紀元へ移項する、あの最大の危機のひとつのうちにわれわれは今いる。」⁽⁹⁾

また、ルードルフ・ハイムは次のように言っている。

「われわれは現在、精神と精神によせる信仰が大きくほとんど全般的に挫折しかけている状況にいる。

……これはもはや体系の時代でもなければ、文芸や哲学の時代でもない。(替って登場したものは)今世紀の偉大な技術的発明のおかげで物質が生き生きしているように見える時代である。⁽¹⁰⁾」

ドロイゼンは一八〇八年に生まれ一八八四年にベルリンで一生を終えたドイツの歴史家であり、ハイムはドイツの文学史家で一八二一年に生まれ、一九〇一年にオーストリア・チロール地方の小都市、サン・アントン・アム・アルベルクで没している。いずれも一九世紀に活躍したドイツの著名な学者である。その学者たちは一様に自らの生きた時代を「あらゆるものが動揺し」「測り知れぬ混乱と騒擾と野蛮化」の中にあるとし、「精神と精神によせる信頼」が「全般的に挫折しかけている状況にいる」と見なしている。十九世紀の後半から二十世紀にかけてドイツはもちろん、ヨーロッパ全体において旧来の伝統的な世界観全般が巨大な変ぼうを遂げようとしていたのである。

旧来の伝統的な世界観が変ぼうを遂げるには、それを包括する社会の変化なしにはあり得ない。十九世紀後半のドイツにはそうした社会変化が生成していた。当時の経済学者であるウエルナー・ゾンバルトは当時の社会の変ぼうを経済学者の目で次のように捕らえている。

「血縁や地縁を形成させていた古い共同体は今や消滅してしまい、住民は堆積した砂山のように、巨大な新社会の中にまぜこぜにされ、住民相互を結び付けるきずがない。⁽¹¹⁾」

また、スイスの文化史家・文学史家であり、チューリヒ大学の教授である、ヨハン・ヤーコプ・ホネガー（一八二五—一八九六）はこの社会変化の様子をこう述べている。

「測り知れない受容性と多彩さ、巨大な、ほとんど驚くべき内容の豊富さ、しかし、どこにも世界を展望する力や全体を統括するもの、また、人を啓発するものがない。はてしなく見込み、進歩の経過をたどりながら、なお、どこかに認め得る調和もなければ確固とした目的もない。この第一の特性は結合のゆるんでしまったことであり、統一がなく解体の状態である。精神を揺るがす不安が全階層にわたっている。重苦しく不安になって倒れてみたり手探りしてみたりする。……われわれは自らの中にある災いに対する救助策を世界中に求めている。」⁽¹²⁾

いずれの場合でも、一方に伝統的な「血縁や地縁を形成させていた古い共同体」があり、その「共同体」では展望がきき、全体が統括され、それにともなつて人を啓発したりするものが息づいていて、「進歩の経過をたどる」時には無限への期待と「調和」が支配する世界観が実在しており、他方には、「ゲゼルシャフトを形成する力」が社会的な諸階級を通じて明白に顕在する時代の到来が示されている。測り知れない受容性と多彩さ、巨大なほとんど驚くべき内容の豊富さを持つ、この社会は、しかしながら、展望するものも、全体を統括するものも、人を啓発するものもなく、したがって、無限への期待や「調和」はどこにも認めら

れず、崩壊しやすく一時的な通用性しか持たないという状況であつた。前時代を確固として形成していたさまざまな要素を新時代に生成した多彩な要素が打ち壊しながら、しかも、新時代を構成する確固としたものを見い出せない、混沌とした社会状況が十九世紀中葉以後のドイツに出現していたのである。

三 ドイツ三月革命

このように、旧来の伝統的な世界観を新時代に生成したさまざまな要素が破壊しながら、しかも、新時代を統括する確固とした基礎を見い出すことのできない混沌とした状況が十九世紀後半にドイツに出現していたが、その状況のきっかけを作ったものとして十九世紀のドイツの哲学者であり、政治家でもあつた、ルドルフ・ハイムは自らの政治的体験を踏えて、こう述べている。

「われわれはまだ、事物を理念的に形成することに対する、また、さまざまに構成された可能性の世界に対する信念に満ちあふれていたが、そこへわれわれを今から九年前に襲つたものは、ひとつの不幸な政治運動である。その大波は去つた。そして、情熱が衰えると、われわれは名状し難がたい荒野と途方に暮れた自失に取り巻かれてゐる有様に気がついた。われわれが世界運動に身を投じてきたときに抱いた、あの高揚した素朴な確信は、洗い流されてしまつていた。全能と信じられたイデアリスムスは無力であることが判然としていた。われわれは大きな幻滅感のまっただ中に立つていた。そして、われわれ

はいまもその中にいる」。

ここで述べられている今から九年前に起きた「ひとつの不幸な政治運動」とは、一八四八年二月にパリで起きたフランス二月革命に触発されて、一八四八年から一八四九年にかけて全ドイツとオーストリアを巻き込んだ三月革命のことで、その直接的な発端はバイエルン国王ルードヴィヒ一世の愛人でスペインの踊り子ローラ・モンテツ（一八一八一—一八六一）とその一族の政治干渉と、それによって引き起こされたミュンヘン市民の暴動にある。

このミュンヘンの暴動はたちまちドイツとオーストリアの各地に拡まり、ウィーンとベルリンの騒動で頂点に達した。この革命騒ぎでオーストリアの宰相であるメッテルニヒはイギリスに亡命し、三十三年間ヨーロッパから戦争を消したメッテルニヒ体制は崩壊した。新聞・報道の検閲は廃止され、政治的集会の規制は解除され、議会がベルリンとウィーンで開られ、全ドイツの選挙が行なわれ、一八四八年五月十八日第一回の全ドイツ統一の国民議会（Nationalversammlung）がフランクフルト・アム・マインの聖パウロ教会で開かれた。ドイツ人の心に長い間生き続けてきた古き夢、平和と自由の保障されたドイツ再統一は実現されるかに見えた。全ドイツを統括する一人のドイツ帝国の摂政が選ばれ、内閣が組閣され、連邦議会の設置、諸侯の代表権の廃止、そして、主権在民が告知された。

しかし、翌年の一八四九年になると、国民議会内の諸勢力の競合対立による混とんのうちに革命勢力は体制を整えた旧勢力の前に、ベルリンとウィーンを皮切りに、次々と各地で鎮圧され、不運な結果に終わった

のである。

三月革命の荷い手は、フランクフルト・アム・マインの国民議会のメンバーが示しているように、当時の広い意味での知識階級や市民、産業界のリーダーであった。例えば、「百名以上の大学教授、二百名以上の法学者、それに作家、聖職者、医者、市長、高級官吏、製造業者（工場主）、銀行家、大地主、更に、若干の職人の親方と小作人⁽¹⁾」で労働者は一人もいなかった、というふうである。それ故、革命の不幸な挫折は当時の市民階級に大きな影響を与えた。

まず、革命の不運な経過と挫折は、革命側の精一杯の努力が報いらなかったという印象を与えた。もろいと見えた旧勢力の体制は革命の遂行のうちで意外と強固であることが判明し、それと共に、当時のドイツの市民社会に深い諦念の気分が拡まり、これまで高く掲げられてきたイデアリスムスの価値は懷疑にさらされることになった。ドイツ市民階級はこの敗北の痛手から二度と再び完全に立ち直ることはなかったし、以来、自らの力でドイツに国民国家を形成する自信を失なってしまった。そして、その自信の喪失は「事物を理念的に形成することに対する、また、さまざまに構成された可能性の世界に対する信念」、「あの高揚した素朴な確信」、つまり、「全能と信じられたイデアリスムス」を土台にした世界観の崩壊を促したのである。

とは言いながら、カント以来深くドイツ人の内的世界にどっかりと腰をすえ、その精神構造を形成し続けてきたイデアリスムスの世界がわずか一年ほどの革命騒ぎで打ち壊されるはずがない。点滴が岩をうがったのであって、一時的な集中豪雨によるのではない。「全能と信じられた（ドイツ）イデアリスムス」が無力になった淵源は古く、一八四八年から一八四九年の革命以前のはるかかなたにさかのぼらねばならない。

四 自然科学の発達とその影響

点滴のうち最大にして決定的なものに自然科学の諸分野の興隆があげられる。自然科学は十九世紀に入ると、目を見張るほどの発展を遂げ、その発見は物理学、化学、生物学、医学等広い分野に及んでいて、枚挙にいとまがない。そうした業績の中で近代工業技術の発展と関連して、自然科学上の発見の最重要なものとして、次のようなものがあげられている。

一 第一段階は力学の原理を形成することであって、それはニュートンによってすでに決定的な確立を得た。次にわたくしは第二の時期をラボアジエが燃焼理論を確証した一七八〇年に置きたい。工業技術の発展に決定的となった第三の重要な出来事は、一八二八年に生じている。(ヴェーラーによる尿素の合成)。そして、最後に近代工業技術の最近の特に実り豊かな時期は、一八四一年ローベルト・マイヤーによるエネルギー保存の法則の提唱によって開始された。これらの諸発見が工業技術にとって画期的となった。⁽¹⁵⁾」

ここで最初にあげられているアイザック・ニュートン(一六四二—一七二七)は、運動の三法則(Principia Mathematica philosophiae naturalis、一六八七年)の発見者として余りにも有名であるが、精神上で果した二

ニュートンの重要な役割は、ニュートンがこの運動の三原則という現象世界の行動を自らが発見した微分学等の数学で置き替えたことである。つまり、これは現象世界を構成するものもろの行動が数学という現象世界に内存する言葉によつて数式で明示することができることを示したわけで、これ以後、現象世界を構成するものもろの行動は、唯一の絶対者や聖霊という空想上のものによることなく、現象世界そのものに内存する言葉で解示されることになるのであつて、そこに精神上に果したニュートンの重要な役割のひとつがある。

数学による現象世界のさまざまな行動の解明に計量を加えて新たな燃焼の仮説を樹立した人は、アントン・ローラン・ド・ラポアジェ（一七四三—一七九四）である。彼以前には物質の燃焼の仮説として燃素理論（Phlogistontheorie）があつた。それは硫黄と水銀と塩という錬金術の「原理」に基づいて、ドイツの自然科学者であるヨーハン・ヨアヒム・ベツヒャー（一六三五—一六八二）が一六六七年に一種の「燃土」による燃焼理論を唱え出し、その仮説を一六九七年ゲオルク・エルンスト・シュタール（一六六〇—一七三四）が「燃焼理論」として発展、体系化したものであつて、それによれば、すべての可燃性物質や金属には一種の燃焼原理である燃素（Phlogiston）を持つていて、燃焼の際その燃素は空气中に消散するとされている。したがつて、燃焼とは燃素が可燃性物質から空气中に飛び去つた後に灰を残す現象と見なされた。空気は、燃焼の際、可燃性物質から出てくる燃素を受け取る媒体とされていた。それ故、燃素は物質世界に神秘的に付加している一種の火の魂以外のなものでもなく、燃焼理論を数式に置き替えることは不可能であつた。

この仮説は適当に自分の意見を付け加えて、独自の見解が作られたので、発表後多くの化学者から三十年間

ほど支持されてきたが、フランス人のラボアジエは一七七四年から一七八三年にかけて独自の実験を重ねながら、酸素を基本にした新しい燃焼の仮説 (Oxidationstheorie) を提唱し、従来の燃素理論を否定した。このラボアジエの理論は、やがて速やかに一般に採用されて、以後の化学の発展に未曾有の影響を与えたので、「化学革命」とも言われている。

ラボアジエは燃焼される物質とその物質の燃焼後の物質を精密な天秤で精密に測定し、両者の間に生じた重量差から酸素の実在を知り、その酸素と燃焼される物質との結合が燃焼前後の物質の重量差をもたらすとした。ここで特徴的なことは、精密な天秤で精密に測定するという、量的把握を通じて現象世界に生起するさまざまな変化を数式化する基礎を確立したことである。このラボアジエの実験結果で現象世界の変化は、神や精霊の御技ではなく、生命のない諸物質の反応の結果にほかならないことが、証明されたのである。

現象世界の生成を形而上学的な世界の創造という観念から決定的に解放した人に、ドイツ人のフリードリヒ・ヴェーラー (一八〇〇—一八八二) がいる。彼は一八二四年頃、アンモニア水にシアン・ガスを通してシアン酸アンモニウムを作ろうとしたら、結果は尿酸アンモニウムと、えたいの知れない白色の結晶性物質を生成したが、この白色の結晶性物質が四年の歳月の研究の結果、既知の尿素であることが判明した。アンモニア水やシアン・ガスという無機物質から尿素という有機物質を合成した最初の実験としてヴェーラーの発見はとみに有名である。この発見で従来の考えである、有機物の合成には生命力が必要であって、生物体外で合成することはできない、という旧来の観念は打破された。「精霊 (Äther) はその最後の隠れ家である有機体から決定的に追放された。」⁽¹⁶⁾

現象世界からそれを統括する統体である神を切り離し、現象世界をそれ自身の中でのみ理解しようとする傾向に重要な役割を果たした人は、ドイツの医者であるローベルト・フォン・マイヤー（一八一四—一八七八）である。マイヤーは一八四一年「エネルギー保存の法則」を発表したが、内容は「仕事は熱に、また、熱は仕事に変わることができるが、その時一方の量は他方の量に常に比例する」というもので、マイヤー・ヘルムホルツ・ジュールの保存則と呼ばれ、今日ではルードルフ・ユリーウス・クラウジウス（一八二二—一八八八）の発見による二つの法則の中に吸収されている。

この法則は現象世界の変化にはすべてエネルギー（熱）が必要なのであって、そのエネルギーの消費量によって変化の量も決まることを示したもので、これによって現象世界の変化の根源にエネルギーがすえられ、それ以外のなものによっても変化の生じないことを示したのである。この法則で現象世界で見られるあらゆる生成が数学や物理学や化学等の諸法則に還元されて、生成のメカニズムが追求できるようになった。この点でこのエネルギーの保存の法則はあらゆる自然現象に対する大きな枠組として重要な意味を持つ。

これまで見てきたように、自然科学の発展は、その性質上、現象世界に見られる行動や変化を、精密な測定器械を用いて、現象世界それ自体に内在する不可視の世界に光を当て、そこで構成されているメカニズムを数学で理論化して、そこから現象世界で見られる行動や変化を説明したものであって、その点で近代の自然科学の基盤は現象世界の不可視の部分に置かれていたと言える。そして、そこは旧世代の人々の世界観では神ないし、物自体として考えられていた世界であった。

その為、自然科学は、現象世界を統括する統体として想定された神との関係から現象世界を解釈してきた

精神世界、とりわけ宗教界と激しい陰さんな闘争を繰り広げてきた。ガリレオと彼の裁判はその象徴的な事件にほかならない。しかし、こうした争いも一九世紀末には自然科学の勝利に帰し、以後、自然科学はみぞうの発展を遂げることになる。同時に、この自然科学の諸成果は、工業技術の発展と連動して、当時の人々の世界観にも大きな影響を与えた。その一例を少し長いがここに示すことにする。それによって当時の人々の置かれた精神状況がわかるからである。

「われわれの化学者や物理学者が自然を考える時には、その自然には、神という職人のための空間はもはやひとつもない。……創造主は自分の作った作品から引き離された。創造主は諸要素を結合する偉大な組織者としておそらく考えられてきたものと思う。しかし、この諸要素はその後自らの『力』で物体の世界を導く結合を行なった。世界の産出は、あえて言うなら、合理的に形成された過程になった。その過程は数学で表現されうる『諸法則』にしたがって成就される。生産者自らがこの諸法則の作用に従させられ、あらかじめ考慮された結果を作り出す為にはただ一瞬の気のゆるみも許されぬ慎重さをもつてその法則を遵守しなければならない。」

十九世紀の末の頃の人々の見る現象世界には、もはや神や神性や、あるいは、精霊の活躍する余地は無くなっている。現象世界にあるのは、さまざまな法則が働く精巧なメカニズムであった。

【註】

- (1) Ernst, Paul : Friedrich Nietzsche. Seine historische Stellung, in : Freie Bühne 1. 1890. S. 516 ff.
- (2) Mann, Heinrich : Zum Verständnis Nietzsches, in : Das Zwanzigste Jahrhundert. 1896. S. 246.
- (3) Rilke, Rainer Maria : Marginalien zu Nietzsche, Sämtliche Werke, Bd. VI. 1966. S. 1165.
- (4) Mann, Thomas : Betrachtungen eines Unpolitischen, in : Gesammelte Werke, Bd. XII. Reden und Aufsätze. 1960. S. 86 ff.
- (5) Friedrich Nietzsches Gesammelte Briefe, Bd. 3. hrsg. v. Elisabeth Förster-Nietzsche und Curt Wachsmuth. 1905. S. 210. フジツキのツルハシのフタのフタに於けるニッテツェの書翰 Emil Kuh の訳
- (6) Hesse, Hermann : Peter Camenzind, in : Gesammelte Schriften, Bd. I. 1968. S. 259.
- (7) Carossa, Hans : Das Jahr der schönen Täuschungen, in : Sämtliche Werke, Bd. 2. 1962. S. 341.
- (8) Schnitzler, Arthur : Der Weg ins Freie, in : Gesammelte Werke, I. Abt. Bd. 3. 1908. S. 203.
- (9) Droysen, Johann Gustav : Politische Schriften. 1933. S. 307 ff.
- (10) Hayn, Rudolf : Hegel und seine Zeit. 1927. S. 6.
- (11) Sombart, Werner : Die deutsche Volkswirtschaft im neunzehnten Jahrhundert. 1909. S. 511.
- (12) Honegger, Johann Jakob : Literatur und Cultur des 19. Jahrhunderts. 1865. S. 280.
- (13) Hayn, Rudolf : Hegel und seine Zeit. 1927. S. 6.
- (14) Mann, Golo : Deutsche Geschichte des neunzehnten und zwanzigsten Jahrhunderts. 1963. S. 205.
- (15) Sombart, Werner : Die deutsche Volkswirtschaft im neunzehnten Jahrhundert. 1909. S. 147.
- (16) Ebenda. S. 150.
- (17) Ebenda. S. 150 ff.